名寄市病誌　15：64～67，2007

随想

大東亜・太平洋戦争（その1）
—大東亜戦争とは何か、何だったのか—

前上川北部医師会会長　　中村　稔

—本稿は市立名寄短期大学道北地域研究所「地域と住民」第23号（2005. 3）の再掲に追補したものである—

私が美深尋常高等小学校（昭和16年4月美深国民学校）4年生だった昭和16年（1941年）12月8日に始まり，旧制名寄中学校2年生の昭和20年（1945年）8月15日に敗戦となったあの戦争は，支那事変から米英戦争までを，当時の日本政府の正式な呼称（昭和16年12月12日閣議決定）である“大東亜戦争”と言うべきであって，“太平洋戦争”ではない．戦争の呼称は，その当事国の意識と立場によるものであるから同じ戦争でも別の名前がついても不思議でないのが国際常識だからだ．“アメリカ独立戦争”は英国では“アメリカ革命”，あの戦争も，米国では“太平洋戦争”，中国では“抗日戦争”，旧ソ連が発したコミンテルンの“32年テーゼ”では，“日本帝国主義の強盗戦争”である．

昭和20年12月15日，マッカーサーは，「神道指令」を発して“大東亜戦争”の呼称を禁止し，ＧＨＱによって“太平洋戦争”と強制されたのである．この公文書では，「…『大東亜戦争』，『八紘一宇』ナル用語乃至ソノ他ノ国語ニシテ，国家神道，軍国主義，過激ナル国家主義ト離（はな）シ得サルモノハ，之（これ）ヲ使用スルコトヲ禁止スル．…」[1]とある．因みに，“八紘一宇”は日本書紀に初代神武天皇のおことばとして，「六合（りくごう）を兼ねて以て都を開き八紘を掩（おお）うて宇（いえ）を為（な）さん…」とあったものを日蓮主義の田中智学が明治36年に“八紘一宇”と造語したもので，“日本国内の社会をもって一つの家にする”という日本伝来の思想であり，明治の国会神道や軍国主義と直接の関係は全くない．只，大東亜戦争時のスローガンの一つであった．

又，本稿は，戦前・戦中・戦後を生き体験した世代が少ない大学の『年報』に収載されるので，あえて，“大東亜・太平洋戦争”としたのである．

私はあの戦争についておおよそ次のようにみなしてきた．明治維新後，欧米列強の帝国主義勢力のなかで近代化を成し遂げなければならなかった我が国にとり，政治をめぐる思想や制度の発達が未熟であったことを含めて，おおよそ不可避であった．そしてあの戦争の根本性格は欧米の対亜（アジア）侵略であり，それに対して日本も中国大陸や朝鮮半島に欧米の帝国主義列強に伍しつつ，「侵略」の意図を持っていたと考える．それは日本の安全保障を含めて，正確にはそういう傾向が少しずつ目立ってきたのが明治維新から敗戦までの経緯であったと思う．だが国益に叶うならばそうするし，又すべきであるという思想と世論が圧倒的に支配的であったのが20世紀前半までの世界史の流れだったからである．

上山春平は，「…幕末から大東亜戦争にいたるまでの段階では，軍備なき国家は国家の否定を意味し，植民地化を意味した．しかるに，軍備をたくわえ，主権国家が確立し，産業革命をやって近代資本主義国と利害関係が衝突するにいたれば，有効な国際機能のない状態では，戦争にうったえるに他に道はなかったのである」[2]．更に上山は，「先進資本主義国と後進資本主義国のナワバリ争いが『平和愛好国』と『好戦国』もしくは『デモクラシーとファッシズムのたたかい』として，“善玉と悪玉のたたかい”にすりかえられた点にごまかしがあった」．[3]

西部邁は，「戦争に突き進んだについては，日本人の，とくにその指導者の無知や軽率や傲慢が多く関係しているとはいえ，それを含めて，あの戦争には，日本という民族・国家の悲劇的運命を強いるような世界史のほとんど避けることのできない力学が関与していたのである．いや，その勢力に屈従するという選択肢は残されていたが，その道を進まずに（大東亜の方面では）苦戦を承知

で，また（太平洋の方面では）敗北を覚悟でその勢力に挑んだことそれ自体は我が民族の誇りとしてよいことである」.[4]もちろん,「政治の政策や軍事の作戦における軽率や失敗のなかに我が日本人の欠点を見出し恥を感じることはできるであろう. しかしその恥は，そうした歴史の段階に存在していなかった現代の日本人としては，自らの政策・作戦をより良くするという形でしか活かされ得ないのである」[4].

あの戦争の大義は,「大東亜共栄圏」の設立－欧米の植民地からの独立解放であった. この意味ではそれは結果として実現した. しかし，それだからと言って，私は決して林房雄[5]のようにあの戦争を徒らに賛美し正当化するものではない. あの時代に生きた者として，大東亜戦争は，戦後言われた「民主主義対ファッシズム」の戦いなどではなく，当時の世界史のパワー・ポリティックスにおいて，日本にとってほとんど避け得ない日本の国益を挙げての総量戦であり，歴史的必然性の側面を十分持っていた，と言いたいのである.

西部のいう“民族の誇り”の象徴的存在は，あの残酷なまでに美しかった“神風特攻隊”であろう.

新野哲也[6]によれば，あの大戦における“神風特攻隊”に世界は驚愕した. 多くの西洋人は「上官に強制された」,「麻薬を注射された」,「気がちがった」とあげつらった. フランスの「神風」の著者ベルナール・ミロもその一人だった. しかし，その後，取材や日本精神の研究を進めているうち，特攻隊員が極めて理知的で深い思想を持ち，しかも出撃の際，だれもが冷静だったことを知る. それは，靖国神社や知覧に残る彼らの手記を見れば明らかである[7].

ベルナールはむろん，日本人のこの死生観が宗教的背景を持っていることを知っている. それは仏教ではない，国家神道とも違う. やがてそれがもっとも土着的な,“神社信仰”だと気づいた. それは，土一揆的な，コミュニティーと一体化した郷土愛が昇華したものに近い.

“特攻隊”を編成した大西瀧次郎は,「特攻隊の諸君には気の毒だったが，かれらの精神はのちの日本に生き，日本精神の支柱となっていつまでも生き残るであろう」と述べ，次のような辞世のことばを残して割腹して果てた.

「特攻隊の英霊に曰す. よく戦ひたり，深謝す. 最後の勝利を信じつつ，肉弾として散華せり. 然れ共其の信念は遂に達成し得ざるに至れり. 吾死を以て旧部下の英霊と其の遺族に謝せんとす. 次に一般青年壮年に告ぐ. 我が死にして，軽挙は利敵行為なるを思ひ，聖旨に副ひ奉り，自重忍苦するの誠ともならば幸ひなり. 隠忍するとも日本人の衿持失う勿れ. 諸子は国の宝なり. 平時に処し，猶ほ克く特攻精神を堅持し，日本民族の福祉と世界人類の和平のため，最善をつくせよ.」[6] この文面にあるのは，国家主義的な陶酔とは全く違ういわばパトリオティズム－郷土愛に似た情緒であり情感である，と言ってよい. そして，これは現代でも立派に通用する“ことば”である. 大西は,「国家に命を捧げよ」と言ったのではない. 国家を支える,“日本精神”の生き残りをかけて“神風特攻”を決意したのだ，と言うことである. 又，門司親徳によれば，大西が夫人に残した遺言の末尾とは,「之でよし百万年の仮寝かな」とあったと言う（文芸春秋 2005. 2 月号）

「特攻隊員達は，大西と共に，郷土をとおして国家を眺めていた. 見方がばたばた倒されてゆく. それならばと“刺し違い”戦法を編み出す長老に，純粋な若者たちが承順と，あるいはすすんで意に従ったのは,“故郷”という普通の語らいがあったからであろう. 再び言う.『死して護国の鬼とならん』の思想は,『上司からの命令』で生まれることはない. かれらは，故郷の山や川，親・兄弟・姉妹や友に思いを馳せ散っていった. そして，その散華の仕方を見守ったのが靖国神社だった. かれらが『靖国で会おう』を合言葉にしたのは，靖国神社が国家的な慰霊詞（ママ）だったからではない. 日本という国の“鎮守の森”だったからである」[7]. それは，人間魚雷「回天」隊員たちも同様だった[8]. そして，小泉総理の靖国神社参拝への「大阪靖国訴訟」裁判で，原告代理人が毎回繰り返した「国は戦死すれば靖国で神になれると国民を騙して侵略戦争に赴かせ犬死させた」のではなかったのである[9].

私は，大西瀧次郎の言う“日本精神”の衣鉢を引き継いだのは，若い頃，戦前・戦中を体験した大正後期から昭和一桁や二桁前半の世代ではあるまいか，と思っている.“東京裁判”以来,「日本は悪い国だ」とアメリカに決め付けられながら，それぞれの立場で，この日本を，あの焼け野原から経済大国に立て直す原動力となったからである. それは，皆が戦前・戦中・そして戦後の占領期に生き成長したからであろう.

そして私は，あの 1960 年 6 月 15 日の“60 年安保”も，上山春平[10]が言うように，形は違って

いても，あれは単なる左翼学生の“安保騒ぎ”ではなく，日本の戦後史が過去の失敗から学んで進みつつあることを，あの世代（昭和二桁初期<筆者註>）が証明してくれた正当に評価されるべき歴史的な出来事だった，と思っている．そして，前述した西部邁も亦，一方の旗頭として参加していた（「60年安保－センチメンタルジャーニー」文芸春秋社）．しかし，その後は“新左翼”といわれる連中の「内ゲバ」などによって，何一つとして形にならず，私の思いと違って別のものに変貌してしまったのは誠に残念である．

これらのことに気づくなら，私は再び言う．戦前・戦中の日本のあり方を，そうした歴史の段階で存在していない者が，“東京裁判史観”と相俟って，当時世界で共有されていた価値観や規範によらず現代の日本の価値観で，戦前・戦中を単なる誤謬と一蹴し足蹴するような戦後のあり方は根本的に間違っている．もしさまざまな誤りがあったとしても，それから学び，現在に相応しい形で蘇生させ生かすことが肝要なのではないか[11)12)]．なほ，こうした誤りを拡大再生産する主役を担ったのが，戦前・戦中何も発言をしなかったのに，占領軍に迎合して戦後突然発言し始めた東大法学部・経済学部の教授連だった．特に法学部長横田喜三郎によって“東京裁判”が正当化されたのである．因みに戦前・戦中活発な発言をしたのは，経済学部の矢内原忠雄教授と河合栄次郎教授だった．戦後，マルキストの大内兵衛教授が生き残り，自由主義者河合教授が急逝されたのは，戦後のあり方に大きな影響を与える一大痛恨事であり，誠に残念なことだった，と私は思っている．

なほ，極東軍事裁判の主導者だったマッカーサーは解任（1951年4月）されて帰国し，米上院の軍事外交合同委員会の聴聞会で，「開戦前の日本には近代国家として必要な重要物資は蚕以外なにもなく，石油などの重要物資は東南アジアに依存していたが，我々は囲い込んでその物資を日本に売らさないように画策した．そうした状態に日本を追い込んだ以上，日本が自衛のために戦争をするのは仕方なかった」[13)]と発言していることをここに追加しておこう．

又，故大平総理は，靖国神社参拝についての中国の批判に対して，「A級戦犯や大東亜戦争はやがて歴史が明らかにするであろう」と国会で言い切り，中国の反論もなかった．同じ敗戦国であるドイツにない“A級戦犯”は全く特別な意味のあるものではなかったことを，“東京裁判”を通じていずれ稿を改め明らかにする．

更に追加しよう．確かに，東條首相の大東亜共栄圏思想は付け焼刃的な面があった．しかし，大東亜会議に出席し，インド国民軍を率いて日本軍と共に戦ったチャンドラ・ボーズの情熱，ビルマ（現ミャンマー<筆者註>）国軍が「万朶（ばんだ）の桜か襟の色」で始まる日本陸軍の「歩兵の本領」を現在も行進曲としていること，戦後，インドネシアのスカルノが開いたバンドン会議（アジア・アフリカ会議<筆者註>）の精神は，東條首相の大東亜会議とほとんど同じだったこと，更に，マハテール元マレーシア首相は，「数百年にわたりゴム，鈴，香料，コーヒー等をただ同然で持ち帰り財産を得た欧州諸国はその道を閉ざされた．大東亜戦争がなければ，今でもそれが続いているだろう」など．それは，いずれ稿を改めるように，日露戦争で，当時世界最強といわれた白人のロシア陸海軍に，有色人種として始めて完勝し，多くの東洋の若き指導者－インドのM・ガンジー，H・ネルー，中国の孫文や汪兆銘，インドネシアのスカルノなどに自身と勇気をあたえたこと[14)]，国際連盟発足のとき，五大国の一国として日本が提唱した“人種差別をやめる”や，いずれ稿を改める徳富蘆花の言う“日本の天職”と言う意識が末端の兵まで浸透していた結果によるものではないか，と私は思っている．

****

本「年報」第22号で“教育”にふれ，それが，“私と西田哲学との最後の語らい”と述べたが，大東亜戦争に関わるにはどうしても西田哲学に触れざるを得ない．次号で稿を改める．

****

参考文献

1）松本健一「占領された民族の記憶」正論2002.9産経新聞社（2002）
2）上山春平「大東亜戦争の思想的意義」中央公論昭和61年9月号，中央公論社（1986）
3）上山春平「大東亜戦争の遺産」中央公論社（1972）
4）西部邁「知と痴にはまることなかれ」正論1997．産経新聞社（1997）
5）林房雄「大東亜戦争肯定論」番町書房（1970）
6）新野哲也「日本人の神社信仰」正論2002.8臨時増刊号，産経新聞社（2002）
7）福島春樹「散華した若者たち」正論2002.9，産経新聞社（2002）
8）片岡紀明「人間魚雷『回天』隊員の笑顔は報いられたのか」正論2004.5(2004)
9）稲田朋美「日本の総理は正々堂々と靖国に公式参拝を」正論2004.5(2004)

10) 上山春平「日本の思想」岩波書店（1998）
11) 小室直樹「大東亜戦争ここに甦る」クレスト（1996）
12) 小室直樹「日本の敗因」講談社（2000）
13) 小堀桂一郎「東京裁判日本の弁明」講談社学術文庫
講談社（1985）
14) 兵藤長雄「教科書が書けない日露戦争」文芸春 2004.9
文芸春秋社（2004）